様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：６２６０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2014
課題番号：２４６５３２８６

研究課題名（和文）Ｉｎｄｉｒｅｃｔ　Ａｇｇｒｅｓｓｉｏｎに関する国際比較研究

研究課題名（英文）The Comparative Survey on Indirect Aggression

研究代表者
滝　充（TAKI, MITSURU）

国立教育政策研究所・生徒指導・進路指導研究センター・総括研究官

研究者番号：５０１６３３４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：　2004～2006年のIndirect Aggression（「いじめ」に代表される、あからさまな暴力を伴わない攻撃的行動）の国際比較では、日本は「暴力を伴わないいじめ」の経験率が突出していることが示された。本研究では、それが日本社会に固有なのか、暴力の少ない社会に共通するのかを確かめるため、スウェーデンと日本の比較調査を実施した。
　現時点で分析可能なデータからは、スウェーデンでは日本と同様、「あからさまな暴力を伴う攻撃行動」の経験率は少なく、「暴力を伴わないいじめ」の経験率が高いことがわかった。しかし、日本では経験率の低い「軽い暴力」や「器物損壊」の経験率も、スウェーデンでは高かった。

研究成果の概要（英文）：The comparative survey on Indirect Aggression in 2004-2006 shows Japanese children experience the bullying without physical violence highest among countries. This study clarifies whether such tendency is peculiar to Japan or common to the less violent society using the comparative survey between Sweden and Japan.
The available data at the present time show Sweden has less experience of the bullying with physical violence and more experience of the bullying without physical violence like Japan. However, Sweden has more experience of the bullying with light physical violence and the bullying by damaging property unlike Japan.

研究分野：生徒指導

キーワード：いじめ　bullying　aggression　indirect　Sweden

１．研究開始当初の背景

日本の「いじめ」研究は、1980 年代から 30 年以上の歴史がある。一方、欧米の bullying 研究も、本格的な研究の開始は 1980 年代からと言ってよい。しかしながら、両者は、それぞれに関わりを持たないまま発展し、1990 年代を迎える。そして、双方の研究者に交流が生まれたことで、「いじめ」と bullying は等しい行為として論じ始められるようになる。

しかしながら、「いじめ」と bullying の概念には大きな違いがある。「いじめ」の場合には、1980 年代にそれまでの「校内暴力」とは別の新たな問題、すなわち「悪質な嫌がらせやいたずら」という「暴力を伴わない」行為に対して「いじめ」という概念が用いられるようになった。

それに対して、bullying の場合にはそのようなこだわりはない。むしろ、「暴力を伴う」行為は、bullying 概念の前身である mobbing 以来の中心的な行為であり、主たる行為なのである。つまり、「いじめ」と bullying は、「暴力を伴う」行為を含めるかどうかで大きく異なっているのである。

とは言え、日本でも近年、マスコミの誤用によって「いじめ」概念には混乱が生じ、「暴力を伴う」行為に対しても「いじめ」の語が安易に用いられるようになっている。その結果、学校現場における「いじめ」対策に関しても、混乱がもたらされようとしている。

そこで、そうした混乱を回避するため「暴力を伴わないいじめ」と「暴力を伴ういじめ」といった表現を用いるようになってきている。本研究では、この日本が注目してきた「いじめ」（＝「暴力を伴わないいじめ」）に焦点を当て、分析を行う。その理由は、以下の二点である。

第一に、「暴力を伴わないいじめ」と「暴力を伴ういじめ」とは、発生実態が大きく異なり、その対策も異ならざるをえない。「いじめ」あるいは「暴力を伴わないいじめ」を一般的な「暴力」の文脈で論じるのは不適切である。

第二に、実際に他の国（オーストラリア、カナダ、アメリカ、韓国）と比較した場合にも、「暴力を伴わないいじめ」の経験率は日本で突出しており、反対に「暴力を伴ういじめ」の経験率は日本で極端に少ないことがわかっている。

要するに、日本の「いじめ」（＝「暴力を伴わないいじめ」）に焦点を絞り、なぜ日本で突出するのかについて、その社会的背景を明らかにすることは、学術的に見ても、実際に対策を講ずる上でも、大きな意味を持つと考えられる。

２．研究の目的

本研究では、研究代表者を中心に 2004～2006 年に実施された Indirect Aggression（「いじめ」に代表される、あからさまな暴力を伴わない攻撃的行動）の国際比較調査（NIER プロジェクト）の結果を踏まえ、「暴力を伴わないいじめ」の経験率が日本で突出しているのは、日本社会に固有の傾向なのか、暴力の少ない社会全般に共通するものであるのかを確かめることを目的とする。

そこで、日本と同じかそれ以上に暴力が少ないとされるスウェーデンにおいて同様の調査を実施してもらい、どのような発生実態が示されるのか、そこに影響を及ぼす要因間の関連はどのようなものになるのか、等を比較分析する。

これにより、欧米では見過ごされがちな Indirect Aggression に関する研究を、より一般化できる形で理論化することができ、大規模な国際比較調査へとつなげていくことも可能となると考えられる。

３．研究の方法

2004～2006 年に行われた Indirect Aggression の調査で使用された質問紙を用い、日本とスウェーデンの小学校６年生（基礎学校６年生）と中学校２年生（基礎学校８年生）を対象に、質問紙調査を行う。

スウェーデン語への翻訳は日本側が行い、最初に日本語版と英語版からスウェーデン語版を作成し、作成されたスウェーデン語版を英語版と併せてスウェーデンの研究協力者に検討してもらった上で完成版とし、スウェーデンでの調査に使用する。

この質問紙調査は、日本では、半年に１回の調査を追跡的に３回（１年半にわたって）実施する。そして、スウェーデンでは、最低１回の調査を実施することとし、可能であれば（学校側の了解が得られれば）、半年に１回ずつ計３回の追跡調査を（１年半にわたって）実施する。

この追跡的な調査の実施は、被害・加害に関わっているのが特定の子供のみなのか、逆に多くの子供が入れ替わりながら関わっているのかを確認する際に必要となる。

なお、日本における調査に係る経費ついては、この科学研究費より支出するが、スウェーデンにおける調査については相手の研究費からの支出とした。つまり、相互に独立した共同研究という形をとっている。ただし、情報交換のために必要な渡航費（日本→スウェーデン、スウェーデン→日本）は、科学研究費から支出し、研究の主導権は日本がとる形になっている。

４．研究成果

(1) 調査の実施状況

３年間（平成 24～26 年度）の研究期間内に、日本においては予定通りに３回の追跡調

査を実施した。しかしながら、スウェーデンにおいては、学校の応諾を得る関係から実施が遅れ、期間内にデータ入力にまで至ったのは１回分(26 年度春期)のみにとどまった。

ただし、スウェーデンの調査は、26 年度冬期にも実施済み（データ未整理）で、27 年度夏期にも実施される予定である。つまり、３回分の追跡的データが得られる見込みである。それゆえに、本格的な分析に着手するのは平成 27 年度末にまでずれ込むものの、当初の研究の目的は、最も理想的な形で達成できる予定であることを付け加えておきたい。

また、実施時期が日本と大きくずれたことから、データの時期的な整合性にずれが生じている。そこで、日本でも 26 年度の冬に、追加の調査を実施した。また、27 年度の夏と冬にも調査を実施する予定である。これにより、調査時期が異なることによる影響を免れることができる。

(2) 現時点で分析可能なデータからの知見

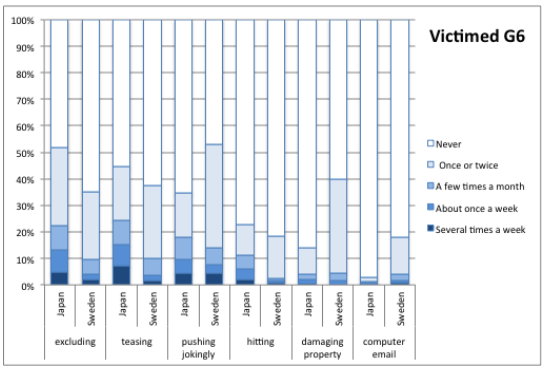
以下では、現時点で比較可能なスウェーデンの 26 年度夏期と、それと比較するために行われた日本の 26 年度冬のデータを用い、２国間の「いじめ」の被害経験率や加害経験率について紹介したい。

ちなみに、日本のデータは小６、中２ともにおよそ 750 名、スウェーデンのデータは６年生およそ 450 名、８年生およそ 350 名である。

①小学６年生の被害経験率の比較

最初に、小６の被害経験率から見ていきたい。尋ねている項目は、excluding（仲間はずれ、無視、陰口）、teasing（からかう・悪口）、pushing jokingly（軽くぶつかる・叩く・蹴る）、hitting on purpose（ひどくぶつかる・叩く・蹴る）、damaging property（金銭強要・器物損壊）、computer email（パソコン・携帯）の６項目である。

また、回答は、Never（まったくなかった）、Once or twice（今までに１～２回）、A few times a month（月に２～３回）、About once a week（１週間に１回くらい）、Several times a week（週に数回）で答えてもらった。



さて、上の図から分かるとおり、今回示された日本の数値は、これまでと同じ傾向を示していると言ってよい。すなわち、excluding（仲間はずれ、無視、陰口）や teasing（からかう・悪口）が高い経験率を示し、ついで pushing jokingly（軽くぶつかる・叩く・蹴る）、さらに低くなって hitting on purpose（ひどくぶつかる・叩く・蹴る）、そして damaging property（金銭強要・器物損壊）と続き、computer email（パソコン・携帯）の経験率は最も低い。

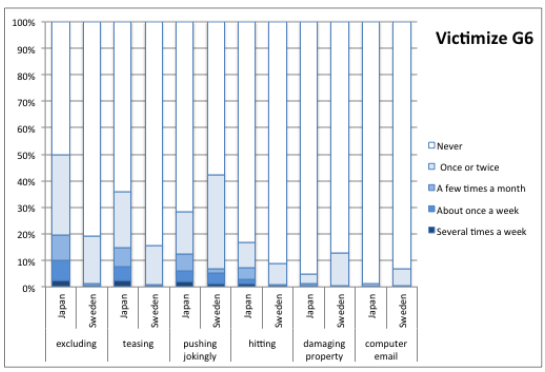
それに対して、NIER プロジェクトの際の他の国の傾向では、excluding（仲間はずれ、無視、陰口）の経験率は日本ほどに高くはなく、むしろ pushing jokingly（軽くぶつかる・叩く・蹴る）の経験率が最も高い。そして、teasing（からかう・悪口）が日本と同じ程度で続く。そして、hitting on purpose（ひどくぶつかる・叩く・蹴る）の経験率は日本と比べると明らかに高い値を示しており、damaging property（金銭強要・器物損壊）、computer email（パソコン・携帯）と続くことがわかっている。

今回のスウェーデンの場合には、社会全体に暴力が少ない国を選んだこともあり、hitting（ひどくぶつかる・叩く・蹴る）の経験率は日本以上に低い。また、excluding（仲間はずれ、無視、陰口）の経験率もかなり高くなっており、日本と近い傾向がうかがえる。しかしながら、日本では三番目に位置する pushing jokingly（軽くぶつかる・叩く・蹴る）の経験率は、NIER プロジェクトの他の国同様、最も高い経験率を示す。さらに意外だったのは、damaging property（金銭強要・器物損壊）の割合が、日本はもちろんのこと、他の国と比べても高い点である。

なお、computer email（パソコン・携帯）の割合も高いが、この項目については、社会経済的な状況の違いが大きく影響するので、今回は触れない。

②小学６年生の加害経験率の比較

では、小６の加害経験率については、どうだろうか。



上の図から分かるとおり、日本の場合には、被害経験の場合とほぼ同じ傾向を示す。すなわち、excluding（仲間はずれ、無視、陰口）、teasing（からかう・悪口）、pushing jokingly（軽くぶつかる・叩く・蹴る）、hitting on purpose（ひどくぶつかる・叩く・蹴る）、

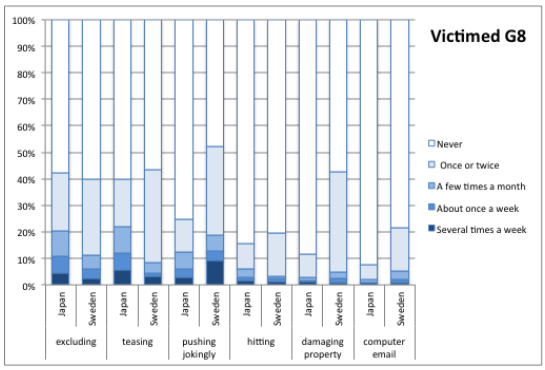
damaging property（金銭強要・器物損壊）、computer email（パソコン・携帯）の順で、高い経験率から低い経験率に並ぶ。

さらに、一般に加害経験率は被害経験率と比べて低い値になることが多い（正直に回答しない？）が、excluding（仲間はずれ、無視、陰口）については、被害経験率と加害経験率の値がほとんど変わらないというのが、日本の特徴である。

それに対して、スウェーデンの場合には、hitting on purpose（ひどくぶつかる・叩く・蹴る）は低いものの、excluding（仲間はずれ、無視、陰口）、teasing（からかう・悪口）も日本の半分程度とかなり低く、pushing jokingly（軽くぶつかる・叩く・蹴る）が突出する。そして、やはり damaging property（金銭強要・器物損壊）の経験率は高く、computer email（パソコン・携帯）も高い。

③中学２年生の被害経験率の比較

では、学年が上がった場合にはどうなるだろうか。中２の被害経験率について見ていきたい。

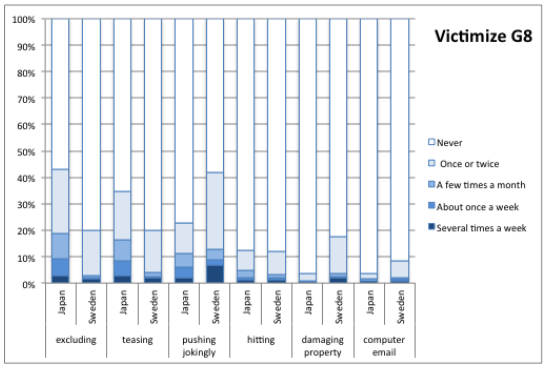


上の図から分かるとおり、日本の場合には、小６の被害経験率とほぼ同じ傾向を示す。すなわち、excluding（仲間はずれ、無視、陰口）、teasing（からかう・悪口）、pushing jokingly（軽くぶつかる・叩く・蹴る）、hitting on purpose（ひどくぶつかる・叩く・蹴る）、damaging property（金銭強要・器物損壊）、computer email（パソコン・携帯）の順で、高い経験率から低い経験率に並んでいく。

それに対して、スウェーデンの場合を見てみると、小６の場合以上に日本に近い傾向を示すことがわかる。まず、hitting on purpose（ひどくぶつかる・叩く・蹴る）は低い値だが、日本を少し上回った。excluding（仲間はずれ、無視、陰口）、teasing（からかう・悪口）の経験率も、ほぼ日本と同じになっている。しかしながら、pushing jokingly（軽くぶつかる・叩く・蹴る）が突出している点は、やはり日本とは異なる。そして、damaging property（金銭強要・器物損壊）の被害経験率も高く、computer email（パソコン・携帯）も高い。

④中学２年生の加害経験率の比較

最後に、中２の加害経験率を見ていくことにしよう。



上の図から分かるとおり、日本の場合には、被害経験率と同様、小６の場合とほぼ同じ傾向を示す。すなわち、excluding（仲間はずれ、無視、陰口）、teasing（からかう・悪口）、pushing jokingly（軽くぶつかる・叩く・蹴る）、hitting on purpose（ひどくぶつかる・叩く・蹴る）、damaging property（金銭強要・器物損壊）、computer email（パソコン・携帯）の順で高い経験率から低い経験率に並ぶ。また、excluding（仲間はずれ、無視、陰口）の加害経験率が被害経験率と似た値という点も変わらない。

それに対して、スウェーデンの場合を見てみると、これもほぼ小６の傾向と変わらない。まず、hitting on purpose（ひどくぶつかる・叩く・蹴る）は低い値で、日本とほぼ同じ。excluding（仲間はずれ、無視、陰口）、teasing（からかう・悪口）は日本の半分程度。そして、pushing jokingly（軽くぶつかる・叩く・蹴る）は突出し、damaging property（金銭強要・器物損壊）や computer email（パソコン・携帯）の加害経験率は小６よりも高くなる。

⑤まとめ

以上の結果からは、以下のような知見が導き出せる。

1) スウェーデンでは、日本と同様、あからさまな暴力を伴う攻撃行動（hitting on purpose：ひどくぶつかる・叩く・蹴る）の経験率は、被害・加害ともに低い。
2) スウェーデンでは、日本ほどではないが、暴力を伴わない Indirect Aggression（excluding：仲間はずれ、無視、陰口）の経験率が高く、中２の被害経験率では日本に近い値を示す。
3) しかし、スウェーデンでは、日本では高い値を示さない、犯罪性の低い物理的攻撃行動（pushing jokingly：軽くぶつかる・叩く・蹴る）の値が高い。
4) さらに、スウェーデンに特有の傾向として、特別な物理的攻撃行動（damaging property：金銭強要・器物損壊）の経験率が被害・加害ともに低い。

このように、暴力の少ない社会同士の比較からは、類似性と異質性とが示されることが分かった。

⑥今後の予定

もともと、１回限りの横断的調査によって国際比較を行うことには危険性が伴う。その意味で、３回分の追跡的データが揃う平成27年度末に、改めて発生実態の詳細な比較とともに、発生メカニズムの比較検討等を行っていく。

５．主な発表論文等

６．研究組織

(1)研究代表者

滝　充（TAKI　MITSURU）
国立教育政策研究所
生徒指導・進路指導研究センター
研究者番号：５０１６３３４０

(2)研究分担者

(3)連携研究者

(4)研究協力者

Antoinette Hetzler (Lund University, SWEDEN)